
清めの湖

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清めの湖

【Nコード】

N2533V

【作者名】

源雪風

【あらすじ】

人の罪を清めるといふ清めの湖と、それに立ち向かう羽目になった少年の物語。

言々魔性の湖

ある村の湖の周りに、たくさんの人が集まっていた。

この湖は、清めの湖と呼ばれている。

村に伝わる伝説によると、この湖に飛び込むと神聖な水によって罪が清められるという。

そして、時には湖の水は罪を持つ人を引きずりこむという。

湖の岸に、高校生の男女二人がいる。

「僕たち」

「私たちは」

「卒業します」

そう言っただけに飛び込んだ。

すると、たちまち消えてしまった。

それを見た人々は、狂ったように湖に飛び込んで消えていく。

村の外から来た少年は、怖くて湖から逃げる。

逃げてきた少年の前にはぬかるんだ田んぼが広がっている。

この田んぼには、清めの湖の水が引かれているため、立ち入れば引きずりこまれるだろう。

しかし、ここを超えて逃げなければ、湖へ向かう人々の波に押し流されて、清めの湖に引きずり込まれてしまう。

リュックの中には、おばあちゃんに持たされたた座布団がある。

こんなもの、何の役に立つんだ。

でも、よく見ると座布団の様子がいつもと違う。

中にぶわぶわ浮いている。

その上に恐る恐る乗ってみる。

すると、田んぼの上空を滑るように進む。

これなら、田んぼを越えられる。

しばらく飛んだ時、田んぼから声がした。

「助けてくれえー」

田んぼに、河童が引きずりこまれている。

天高く田んぼから突き出した河童の手を掴み、引っ張る。

重くて、少年の腕がもげそうだったが、救助に成功した。

「ありがとうございます。よかつたらこれ、もらってください」

河童がくれたのは、鯛の胸びれだった。

少年が首を傾げていると、河童が説明した。

「その鯛のひれがあれば、どんなところで泳げるんだよ」

「でも、かつぱさんは今、溺れてたよ」

「それを使っても、湖の魔力には勝てなかったし、ひれの力を制御しきれなかった」

恐るべし、清めの湖。

さて、これからどんな不思議が少年に待っているのだろうか。

宇宙ラジオ

田んぼを越え、少年は広い日本家屋に着いた。
そこで少年は休ませて貰う。

緑茶を飲んでいると、放送が聞こえた。

「清めの湖から逃げた者達よ。己の罪を許してほしければ、十日以内に十個の宝を見つけよ。

いざなぎという名の少年を隊長とし、もし、隊長が宝を見つけれなければ、全員湖へ飛び込んでもらう」

村の外から来た少年の名は、いざなぎと言った。

急に隊長にされてしまった。

しかも、日本家屋にいる湖から逃げてきたらしい人々は、いざなぎと目を合わせようとしない。

協力する気がないのだろう。

かくして、背水の陣でのいざなぎの宝探しは始まった。

屋敷の主である着物の熟女もみじに、いざなぎは宝について聞いた。河童に貰ったひれと、空を飛ぶ座布団は、十個ある宝のうちの二つであることが分かった。

ということは、あと八つの宝を見つければよいのだ。

宝のありかなど当てが無いので、いざなぎは日本家屋の周りをつろついていた。

そのうちに、方向感覚がなくなってきた。

気がつくくと、屋敷の裏手の森に迷い込んでいた。

疲れてしゃがんでうつむくいざなぎであった。

すると、地面にマンホールくらいの大さの穴を発見した。

いざなぎ胸の高鳴りを覚え、空を飛ぶ座布団で、下降する。

穴は、地下洞窟に続いていた。

そこで薄汚れた男が一人、たくさん機械に囲まれて生きていた。

男はいざなぎを見るなり、目を真ん丸く見開き、後ずさり、腰を抜かした。

「お、お前、どうやってここに入ってきた」

座布団のことを説明すると、村の伝説を思い出したらしく、すんなり納得した。

「俺をこの穴から出してくれ。探している人がいる。この無線機を使って呼びかけているんだが」

男が指をさした先には、針金のアンテナを備えた木製のラジオがあった。

「俺は穴に落ちて、数十年出られなかった。穴の中に捨ててあったラジオで、外へ電波を飛ばして助けを求めているのだが、

誰も助けに来てくれなかった。ああ、やっと外に出られる。もみじさんに会える」

「もみじさん？」

その名は、着物の熟女のそれだった。

「今すぐ会えますよ」

穴から男を引きずり上げ、もみじさんの元に男を連れて行った。

「・・・あなた、もしかして、サダオ？」

「覚えていてくれたのか、もみじ」

互いに再会を喜んでいる。

もみじさんは、涙を流している。

「あの日、俺は山菜を摘んでいて、うっかり穴に落ちてしまったんだ」

「私を捨てて村を出たのだと、不安に思いました。でも、待っていてよかった」

サダオはいざなぎに、先ほどのラジオを渡した。

「穴から出ることが出来た今、これはもう必要ない。これは、宇宙

ラジオという宝の一つだと、もみじが教えてくれた。

宇宙の全ての声を拾うことが出来るそうだ。今は君がこれが必要だ
ろう」

「ありがとうございます」

人助けもして、宝も手に入れて、幸先がいい。

いざなぎは、もみじとサダヲの幸せを願った。

幻シネマ

湖は数年に一度、罪ある人を引き付ける力が強まる年があるという。いざなぎはその力を鎮める効果があるという映画を、シネマへ見に行くことになった。

厄介になっている日本家屋の使用人に連れて行ってもらう。黒いフォルクスワーゲンに乗せてもらい、シネマに着いた。

「この映画は、見る人の魂を映画の中に取り込んでしまうというから、用心するんだよ」と使用人は言う。

「はい」

なぜか、いざなぎはその映画を昔一度見たことがある気がした。とても怖い映画であった気がした。

「どうしても見ないといけませんか」

いざなぎは、恐る恐る使用人に尋ねた。

「この土地の風習だから、仕方ない」

シネマには、ちらほら人がいた。

スクリーンに、画質の粗い白黒映画が始まる。

タイトルは「目玉男爵の冒険」というらしい。

いざなぎの体は、ぼんやりと重くなる。

まるで、気が抜けたようになった。

魂を取り込まれてしまったらしい。

気が付いたら、映画の中にいた。

下町の商店街では、妙な噂が流れていた。

「あの行き止まりのところ、店があつたらう。

でも、急になくなった。おかしいとおもわねえか。

何でもたぬきが化けてやっていたそうだ。

奴らはまだこの辺にいるかもしれねえ。

気をつけたほうがいい」

いざなぎが吸い寄せられるようにその行き止まりに行くと、祭りでもないのに射的とお面の屋台があった。

射的の景品も、お面も、目がきよるきよるしている。

どうやらたぬきが化けているようだ。

いざなぎが行き止まりから出ると、電話ボックスに引きずり込まれた。

黒いもやに包まれた長身の男が言う。

「今見たことは誰にも言うな」

黒いもやから毛むくじゃらの尻尾が見えた。

おそらくこいつもたぬきが化けている。

電話ボックスのガラス越しに、人々の視線がいざなぎに刺さる。

やっと開放されて、よろめきながら電話ボックスから出て歩く。

そのまままっすぐ歩いていると、不思議なものを見かけた。

家の庭に、狛犬の石造で小学生くらいの大きさのものが一匹、佇んでいた。

普通、狛犬は二匹セットだ。

口が開いている「あ」と、口を閉じている「うん」がある。

でも、そこには「うん」だけがある。

そこで映画は中断された。

魂を取り込まれた人が多かったようだ。

キネマからの帰り道、いざなぎは、車から外をぼんやり見ている。

すると、映画に出てきたものと同じ狛犬を見つけた。

気になるが、車は通り過ぎる。

気になったいざなぎは、車から降りた後、歩いて引き返して狛犬のもとへ行く。

途中で、名の無い歌詠みの伏字だらけの短歌集をもらった。

狛犬の元に着いてよく見ると、狛犬の口が開いていた。

そして、舌の上に灰色の豆腐のような四角い石を見つけた。

いざなぎは、それを手にとってポケットにしまう。
後にもみじに「それは宝の一つ、悟り石だ」と言われた。
悟り石は、文字の書いてある紙に当てると、隠された意味を紙に浮かび上がらせるという。

それを短歌集の伏字に当ててみる。

たちまち伏字だったところに、文字が入った。

そこにはこう記されていた。

贖いし 湖の水消えるとき 心の秘密 隠されている

湖の水が引いたところに、何かあるのかもしれない。

また湖に行くのは嫌だが、宝があるかもしれない。

それなら行こう。

いざなぎは決心した。

記憶のレンズ

村の田んぼは、すっかり干上がっていた。

湖の水を引いている田んぼだから、湖の水も干上がっているかもしれない。

おかげで、田んぼに引きずり込まれることなく、いざなぎはまっすぐなあぜ道を進む。

一駅くらいの距離を歩いたとき、湖に着いた。

湖は、見事に干上がっている。

いざなぎは恐る恐る、湖のあつた窪みへ降りる。

そこには、湖に消えた人々の持ち物が落ちていた。

短歌にあった心の秘密とは、落し物のことだったのだろうか。

まんべんなく見て回っていると、少しずつ水が湧いてきた。

早く宝を見つけないと、引きずり込まれてしまう。

不意に、日の光が差しした。

そして、湖の中心に光り輝くものがあるのを教えてくれた。

水かさが増してきたので、空を飛ぶ座布団に乗って湖の中心まで行く。

輝いていたのは、牛乳瓶の底のような分厚いレンズだった。

何とか水が、湖の中央に来るまでに拾うことが出来た。

レンズで空の雲を見る。

雲を横切っていた鳥も、レンズに映った。

「お腹減った」

鳥の心の中が見透かせた。

これは、記憶レンズという、宝の一つだった。

レンズ越しに見たものの思っていることが分かる。

しかし、レンズ越しに自分を見ると、レンズが心の乱反射を起こし

て、耐え切れなくなり粉々に砕けるといふ。

これで、いざなぎの手元にある宝は四つになった。

導きのトランプ

いざなぎは、ヒントを求め町を通る。

木造の商店とガス灯と、レンガで舗装された道が大正時代のような雰囲気を出している。

あてもなく歩いていると、目の前に黒マントの男が立ちはだかった。「君、よいレンズを持っているね。私の片目は義眼でよく見えないんだ。それを私に出来ないかな」

「宝を十個集めないといけないので、できません」

いざなぎは、走り去ろうと思ったが、足が固まって動かない。男は妖怪なのだろうか。

「そうかそうか。では、これを役立てることが出来るだろう」男がマントを翻すと、男の姿は消えた。

そして、トランプのハートのエースが落ちていた。

拾って観察すると、複雑な模様を中心に目玉のようなマークが記されていた。

「もしやさっきの男は、目玉男爵だろうか」

映画のタイトルが実在するとは思えないが、そんな気がする。だとしたら、このトランプも宝だろうか。

試しに悟り石をトランプに当ててみると、文字が出てきた。

『私は導きのトランプ。あなたを望むものへと導きます』

望むものというと、宝のことが思い浮かぶ。すると、トランプに文字が浮かぶ。

『次の宝は運命の筆。運命を書き換える呪われた筆』

目玉男爵の過去

運命の筆を探しに行こうとしていたいざなぎは、屋敷の使用人に呼び止められた。

「目玉男爵の冒険の続きが、上映されるらしい。一緒に見に行くか？」

いざなぎは連れて行ってもらうことにした。

映画館に着くと、すぐに映画が始まった。

山の中に、若い女性が一人いる。

女性の持つ籠の中には、きのこ山菜がいっぱい入っている。

すると、女性の所にきのこを持った大狸がやって来た。

「このきのこ、おいしいですよ」

「あつ、これはサトヒメタケ。こんな珍しいものをいいんですか」

「おうよ」

女性は喜んできのこを受け取った。

帰宅した女性は、山菜ときのこのおこわを作った。

「ただいま」

そこに男が帰ってきた。

「お兄様、おかえりなさい。」

今日は山で採ってきた山菜ときのこで、炊き込みご飯を作りました。きつとおいしいですよ。

ヒメサトタケが入っていますから」

「そうか、楽しみだな」

「お兄様、顔が汚れておいですよ」

女性はエプロンで、兄の顔を拭いた。

「工場の仕事は、汚れていけないね。機械相手の仕事も疲れるものだ」

とは言うものの、兄の目は輝いていた。

「お父様の具合は？」

兄は、笑顔をふつと消して尋ねた。

「眠ったままです」

「薬が効いていないのか」

重い空気が二人を包む。

「とにかく夕飯にしましょう」

夕飯の後に、事件が起こった。

兄が急に熱を出して倒れたのだ。

原因は大狸からもらったきのこだった。

妹は疲れた兄の為に、ヒメサトタケを全部兄の炊き込みご飯に混ぜていた。

あれはヒメサトタケそっくりの、毒キノコのクロヒメタケだった。

お医者様がかけつけて解熱剤を処方したが、効いている様子は無い。熱のせいで兄の片目は白く濁り、見えなくなってしまった。

目はどんどん痛んで、ついには体を蝕むようになった。

兄は仕方なく片目を取り、義眼にした。

すると、兄は元気になった。

狭い村には、たちまち事件のことが広まった。

「きつと妹が遺産を手に入れるために、父と兄を殺そうとしているんだ」

兄と妹の父は、金持ちで、とても優しかった。

しかし、妻に先立たれてから父は誰も信じなくなり、息子と娘にお金を分けなくなった。

それまで両親に施されていた兄と妹はいきなり貧しくなり、兄は工場で働くようになった。

だが、工場での稼ぎでは二人分の生活費には足りず、生活は苦しか

った。

母は遺書に『母は息子と娘に遺産を与えるから、父もそうして欲しい』と書き残していた。

父は、妻のことだけは信じているので、遺書に『息子と娘に遺産を譲る』と書いた。

父が亡くなれば、遺産が手に入る。

村の人々は金持ちの父をよく思っていないかった上、兄と妹の苦しい生活と、遺言の内容を知っていた。

そのため噂はどんどん広がった。

噂はついに妹の耳に入った。

追い詰められた妹は、次第に心を病んでいった。

妹は苦しんだ末、清めの湖にその身を投げた。

兄は怒りと絶望に震えた。

そんな時、村の長老から十の秘宝の話聞いた。

「宝を全て集めて湖に潜れば、湖に飛び込んだ人を一人だけ救い出せる。」

しかし、救い出された人は心と記憶を湖に食われてしまっているゆえ、物言わぬ人形のようになってしまふ」

「それでもいい。妹の無実を晴らし、また一緒に暮らしたい」

兄は十の秘宝を集める決心をした。

今、兄の手元にある宝は二つ。

導きのトランプと、夜霧のマントだ。

さあ果たして、兄は妹を救えるのか。

映画は終わった。

導きのトランプは、目玉男爵らしき人が落としていった。

片目が義眼で、映画に出てきた人とそっくりなので、おそらく目玉男爵だ。

宝を一つ持っているようだから、いつか会わないといけない。
映画で、妹が家へ向かうシーンがあったため、家の場所は変わって
いなければ分かりそうだ。
しかしもう今日は日が沈み、暗くなっている。
いざなぎは、明日行くことにした。

春の雨

導きのトランプを見つけた夜のことだった。

なかなか寝付けなかったので、導きのトランプに宝についてのヒントをもらった。

『運命の筆は呪われし巫女が持っている』

『月のしずくは月の涙』

『心のパズルは近くにある』

教えてもらったのはこれだけだ。

短歌集にもヒントがあるかもしれないので、悟り石を当てる。

春雨は 空の涙と いうなれど 月の涙は いずこにありや

砕かれし かけらを一つにせし時ぞ 真の姿が 導かれける

ヒントから考えると、月のしずくは春雨とあるから春で雨の日に見つかるかもしれない。

幸い、今は春だ。

あとは雨の日を待つだけだ。

心のパズル

朝に、いざなぎは屋敷で迷ってしまった。
まだ朝食も摂っていない。

へとへとになりながら、がむしゃらに障子を開けていく。
すると、おかつぱ頭で赤い着物を着た少女が、パズルをしていた。
もしや、あれは心のパズルだろうか。

「お兄さん、どうしてもこのパズルが出来ないの。手伝って」
少女のどんぐり眼に見つめられる。

「いいよ」

しかし、さすがは心のパズル。

絵柄が全て同じようだし、ピースが多く、とても難しい。

二人掛りでも完成できるか不安だ。

その上、朝食を食べていないため、頭がぼーっとしている。

昼過ぎ頃、最後のピースを、二人で「せーの」と入れると、やっとパズルが完成した。

気が付くと少女は消えていた。

そして目の前には、木製の板があった。

ふと少女の声がした。

「あなたは心のパズルに認められたよ。きっとパズルが大切なことを教えてくれるよ」

パズルには、何の絵も描かれていなかった。

「大切なことは、自分で見つけろってことかな。それが大切なことなのかもね」

いざなぎは呟いた。

運命の筆

いざなぎは、呪われた巫女の元へ向かう。

社は、屋敷の裏の森にある一本道の先にあつた。

神社には、賽銭箱に寄りかかっている若い巫女がいた。

キセルを啜えてふかしている。

「ありや、誰か来たがね。珍しやあ。雨でも降るんじゃないけ」

いざなぎは、巫女に事情を説明し、運命の筆を見せてもらうことになつた。

二人は神社の裏にある蔵へ入る。

「これだがねえ。持てるかえ」

黒い筆の持ち手には、貝殻で、花の彫り物がしてある。

いざなぎは、やすやすと筆を持つことが出来た。

「へえー。持てんのかえ。なら大丈夫かね。お前さんにしばらく貸してやるかね」

「でも大丈夫なんですか。運命を書き換える力がある筆と聞きましたよ」

いざなぎは不安になつて、巫女に尋ねた。

「ああ、大丈夫大丈夫。わたしが力を解放せにや、筆の力は使えんのよ。持つてき」

「ありがとうございます」

いざなぎは、深くお辞儀をした。

「あい、がんばってちよ」

呪われし巫女は、ゆるい人だつた。

謁見！目玉男爵

いざなぎは、宝のヒントを得るべく目玉男爵の家へ向かうこととした。屋敷で自転車を借りて、女中に書いてもらった地図を頼りに走る。急な坂や沼地、壊れかけのつり橋を通る。

目玉男爵は、随分辺鄙なところに住んでいるようだ。

目玉男爵の家に到着したときには、空は紅に染まっていた。

小さな木造の家は、心細そうにぼつりとそこにあつた。

ドアをノックすると、男爵が出てきた。

「ここが分かったということは、宝を随分集めたんだね。やはり任せてよかった。まあお入り」

家の中は田舎の親戚のうちのよような雰囲気だ。

いざなぎは先ほど気になったことを早速尋ねる。

「任せるって、どういうことですか」

「清めの湖の魔力に逆らえるような強い心を持った人に、宝探しを手伝ってもらった」

「びつくりTVでいう、仕掛け人だったわけか」

「君の言っていることはよく分からないが、おそらくそうだと思う」

「10日以内に宝が見つけれなかったら、清めの湖に飛び込まされるというのはどうしてですか」

「私は気が短くてね。ちよつとせかしてみたのだ」

目玉男爵は、にこにこした。

「宝を集めさせても、僕に横取りされるかもしれないのでは」

「横取りできなそうな奴に任せたから、心配ない。もし、横取りするようなら、清めの湖に落とせばいい」

目玉男爵は変で、怖い。

早く帰りたいといざなぎは思った。

「十個宝を集めないといけないので、夜霧のマントを貸してください」

い

「あつ、それならいい。最後の一つは、私が格好をつけて登場して、格好をつけて渡す」

「格好をつけたいただけですか」

「そうだが。それで今、いくつ宝を持っているんだ」

「あと二つで十個です。夜霧のマントと、月のしずくだけです」

「なにっ、私が数十年かけても見つけられなかったのに、君は数日で8つも見つけたというのか」

目玉男爵は、シヨックでぐったりした。

「えっ、どこで見つけたのか教えてくれ！くやしい」

いざなぎは、宝を見つけた場所を教えた。

「まさかそんなところに……。初めから一つ宝を持っているのはずるい。」

河童とはケンカしているからな……。

仲良くしておけばよかった」

男爵は、ぶつぶつ呟いた。

「ま、ともかくあと一つがんばってくれ。私はもう心が折れた」

この人は本当に妹を助ける気があるのだろうかと、いざなぎは思った。

男爵の愚行

最後の宝、月のしずくは雨の日に入ると手に入る。

いざなぎは、雨の日をひたすら待った。

しかし時間はどんどん過ぎて、宝探しを始めてから九日目になってしまった。

「雨、降ってくれないかな。清めの湖に突き落とされるよ」
いざなぎは空を見上げる。

雲ひとつ無い夜空に、星がキラキラ笑っている。

追い詰められたいざなぎは目玉男爵に相談し、宝探しの期限の延長を申し出た。

「ふむ。月のしずくは雨の日でない手に入らないのか。よし、分かった。私が雨を降らせよう」

男爵が押入れを開けると、錆びた鉄製の箱が出てきた。

「勤め先の工場で作っている、アメフラシ君だ」

男爵はアメフラシ君を野外に置き、スイッチを押した。

たちまち空の雲が消えて、きれいに晴れてしまった。

「あれれ」

ボタンを連打する男爵。

押すたびに、青空がきれいになる。

「ははは、失敗した」

「どうするんですか」

いざなぎは、さすがに怒った。

「巫女なら何とかしてくれる。私は心が折れた」

箱を外に放置して、家にとぼとぼ入る男爵であった。

魔の巫女

いざなぎは巫女の元へ行き、事情を説明した。

「ふっ、あのへっぽこなすびが」

「お知り合いですか」

「あいつとは幼なじみでなあ」

巫女は深いため息をついた。

あんな妙な人が幼なじみだなんてたいへんだなど、いざなぎは思った。

「そんなことはいい。雨を降らすのかえ」

「はい」

「出来るかわからんが、久しぶりに力を使うかねえ」

巫女は神社の建物の中に籠って、呪文を唱え始めた。

「ナエド、トナエド、アガナエド、ツグナエド・・・」

いざなぎは、祈りながら待った。

すると、ほんの少しずつではあるが空が曇ってきた。

いけるかもしれない。

いざなぎは空を見上げる。

雨よ降れ！

しかし、降ってきたのは雪だ。

春の雪とは珍しいが、喜んでいられない。

雨でないといけない。

「あちゃー。ま、しばらく待てばみぞれになり、雨になるっ」

そうだ。雨になるまで待とう。

「ありがとうございます。おかげで雨へ一歩近づきました」

「むう、お礼は雨になってから言ってちょ」

巫女は、照れくさそうにそそくさと神社の建物の中に入った。

巫女の魔力

さて、雨にはなったがどうやってしずくを探そうか。短歌で、月のしずくは月の涙と詠まれていた。

そうだとしたら、月から垂れてくるのだろうか。

いざなぎは迷ったので、導きのトランプにヒントを求めた。

『月に近づけ』

一体どうやって近づけばいいのだろうか。

高いところへ行けばいいのだろうか。

いざなぎは、巫女に村で一番高いところを尋ねた。

「そりゃ、幻山かね。男爵の家の裏手にある大つきな山」

いざなぎは男爵の家に向かおうとしたが、巫女に呼び止められた。

「ちよっと待ちい」

しばらくして、巫女はバイクを引いて登場した。

ヘルメットも装備している。

「ほれ、かぶりんしゃい」

いざなぎは、ヘルメットを渡された。

「あいつの気まぐれの犠牲者として、他人とは思えん。

幻山まで送るかね。

ついでにへっぽこなすびを叱ってやらんと」

いざなぎは、巫女とバイクに二人乗りする。

珍しい体験だ。

「飛ばすから、しっかり掴まってちょ」

ドライブは、地獄だった。

呪われた運転テクニックを持つゆえに、呪われた巫女なのかもしれない。

月のしずく

あつという間に、幻山頂上まで着いた。

あとは、月のしずくが垂れてくるのを待つだけだ。

もしかしたらもう垂れ落ちているかもしれないので、バイクのライトで照らして地面を探す。

あつたのはガラスの破片だった。

宝かもしれないので一応拾う。

いざなぎと巫女は何時間も探したが、宝らしいものは見つからない。

突然、いざなぎの背中にベチャッと何かが当たった。

こんな雨の日に鳥の糞だろうか。

それにしても大きすぎる。

背中に手をやると、透明なスライムがくっついていた。

「まさか、これが月のしずくですか。これじゃ、月のたんみたい」

「もしや、それが真の姿じゃないかね」

「うーん」

さつき拾ったガラスとくっつけてみるが、変化は無い。

心のパズルに乗せても、悟りの石をかざしても、運命の筆でなでても、変化は無かった。

いざなぎは、導きのトランプに悟り石を当てて、ヒントをもらおうとした。

『決まりきったイメージを疑え』

ということ、このべとべとが月のしずくか。

べとべとでは、達成感が無い。

しかし、贅沢を言っている場合じゃない。

これで湖行きは回避出来た。

ひとまず安心したいざなぎであった。

対決！清めの湖

いざなぎは、昼に清めの湖に呼び出された。

行ってみると、夜霧のマントをまとった目玉男爵がいた。

「あつ、おい。来るなら来ると言ってからでないか、格好をつける暇がないだろうが」

「それはいいとして、宝を集めましたよ」

「本当か。よくやった。それを貸してくれ」

「いいですけど、何に使うんですか。まさか」

「湖に飛び込んで、妹を助ける。それには宝は必要だ」

いざなぎは、宝を男爵に渡した。

もういざなぎの役目は終わった。

帰ってもいいが、宝を一生懸命集めたのだから、結末を見届けていくことにした。

「行ってらっしゃい」

いざなぎは思わず声をかけた。

「行ってきます」

目玉男爵は、キリッとした顔になって言った。

潜入！清めの湖

妹を助けるべく、目玉男爵は宝を身に着けた。

空を飛ぶ座布団で、湖の中央へ向かった。

そして湖に飛び込んだ。

普通なら魔力に飲み込まれて溺れてしまうが、夜霧のマントが魔力から守ってくれている上に、鯛のひれの力で泳ぐことが出来る。

悟りの石、導きのランプ、月のしずく、心のパズル、記憶のレンズは心を守ってくれる。

湖の周りには、引きずり込まれない程度の距離に村人が集まっている。

男爵が置いていった宇宙ラジオから、実況中継が聞こえる。

『湖の中には、らつきょうのたまり漬けみたいにたくさんの人が漬かっています』

不思議な湖だからか、鯛のひれの力が分からないが、息は苦しくないようだ。

『この中から妹を探し出すのは大変そうです。心が折れそうです。でも、あきらめません』

ラジオなので、こちらからの声は届かない。

それが歯がゆかった。

がんばれと言いたかった。

でも、今の男爵にそんな言葉は必要ない。

十分頑張っているのだから。

「へっばこなすびめ。本当に助けに行っているのか」

巫女は心なしかうれしそうに言った。

「きつと宝があっても湖からは戻って来られめえ」

村人は、不安そうに呟いた。

「さあどうかね」

巫女は自信ありげに微笑んだ。

『あつ妹だ！・・・と思ったらそっくりさんでした』
「全く、ひゃひゃさせやがって」
村人たちはすっかりラジオの声に、夢中だ。

変わる運命

日が暮れてきても、まだ妹は見つからない。

退屈な村で、目新しい事件があったため、村人はお祭り気分ではしゃいでいる。

酒を飲み始める集団や、歌って踊る奴が出てきた。

この盛り上がりなら妹が助かった後も、村人は妹を受け入れてくれるかもしれない。

夜になると帰っていく人もいたが、「夜宴だ」と言っただけでその場に残りしやぎ続ける人もいた。

「ったく、早く見つけるよ。心配でおちおち眠れやしねえ」

目玉男爵が湖に潜ってから三日が経った。

さすがに村人も飽き飽きしていた時だった。

『あつ、あれは間違いなく妹です。引き上げます』

村人は安全な位置で、身を乗り出した。

「まだかまだか」と意気込んでいる。

十分くらいして、鏡のようだった水面が揺らいだ。

「いたぞー。あそこだあーっ」

村人が指差す先で、水面から男爵と妹の頭がひょこっとなでていた。

男爵は、空を飛ぶ座布団の上に這い上がり、妹を引っ張りあげた。

そして格好をつけた。

村に代々語り継がれるほどの、ドヤ顔をした。

妹は岸に運ばれ、医師の手当てを受けた。

妹は息とまばたきはしているが、目がぼんやりとしている。

男爵が妹に話しかける。

「咲子、兄さんだ。分かるか」

妹の反応はない。

見るに見かねた巫女は、男爵に声をかけた。

「おい、へっぽこなすび。わたしなら妹を助けられるかもしれん」

「お願いします」

「よろしい。しかし血が必要だ」

目玉男爵は何のためらいも無く、義眼を取った。

血が出てきた。

巫女はその血を運命の筆につけた。

そして、呪文を唱えながら妹の額に文字を書いた。

「ナエド、トナエド、マジナエド、アガナエド、ツグナエド・・・」

雨を降らせたときと、少しだけ違う呪文だった。

呪文が終わると、額に書いた文字が消えた。

消えるにつれて、妹の目に少しずつ意識が戻っていった。

「・・・お兄様」

「ああ！よかった咲子。気が付いたのか」

感動の再会だったが、男爵が義眼を嵌め直していないせいで、片目から涙と血がとめどなく湧き出したそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2533v/>

清めの湖

2011年8月9日05時27分発行